

古代の窯跡 出現!



全景



残った天井と側壁

観法寺ジンヤマ窯跡は、金沢東部環状道路「観法寺パーキングエリア」西側の河北潟を望む丘陵の南斜面に立地しています。

窯跡は、丘陵斜面をトンネル状に掘り抜いて造られた窖窯で、7世紀後葉に瓦と須恵器を生産した瓦陶兼業の窯であることがわかりました。窯の上方から排煙口、煙道、焼成部、燃焼部が確認され、排煙口から燃焼部までは約9.3m、床面幅約1.7m、煙道床面から燃焼部床面までの比高差は約3mになります。床面は傾斜角度が大きく、幅はほぼ寸胴で、煙道が直立する構造となっていました。

窯内部では、粘土を貼って築かれた天井や側壁、瓦を置いた床面などを検出しました。焼成部の床面付近では、失敗品や床の補修等に使われた大量の瓦が残っていたほか、床面の壁際には細い排水溝が巡り、その上に瓦を蓋のように並べた箇所もみついています。

今回の発掘は、観法寺地区内の窯跡ではじめての調査事例となり、重弧文軒平瓦、平瓦、丸瓦、須恵器椀などが出土しました。瓦の供給先については、金沢市の広坂廃寺との関連性が指摘されていますが、他寺院への供給の可能性も含め今後検討すべき点も多く、金沢市北部の古代史を考える上で貴重な発見となりました。



窯から出土した軒平瓦と須恵器椀



H30 発掘調査

かんぼうじ いせき かなざわし
観法寺ヤツタ遺跡 [金沢市]

金沢市域の北東部に位置する観法寺ヤツタ遺跡の調査は国道 159 号（金沢東部環状道路）改築工事に先立つもので、隣接する観法寺ジンヤマ窯跡の調査と共に実施しました。

調査の結果、古墳時代～中世にかけての断続的な営みを確認し、主要遺構では7世紀後半の土器が出土した幅約 40 cmの溝、平安時代～中世と推定される掘立柱建物、平安時代後半の幅約 3～5 mの河跡、中世の溝などを検出しました。掘立柱建物は2×2間、2×4間の2棟を確認しました。この2棟の掘立柱建物は計画的な配置で建てられ、同時期に併存していたものとみられますが、柱穴からは遺物が出土しておらず、時期の特定については今後の課題です。河跡からは、観法寺ジンヤマ窯跡で焼かれたと考えられる瓦や平安時代後半の土師器、木製品がみついています。また、中世の溝は山裾を沿うように走り、当時の土地利用を窺わせるもので、土師器皿、陶磁器、銅銭、木製品等が出土しました。

今後は、観法寺ジンヤマ窯跡との関連性をはじめとして、掘立柱建物の時期や遺構の移り変わり、遺跡の性格等を明らかにしていきたいと考えています。



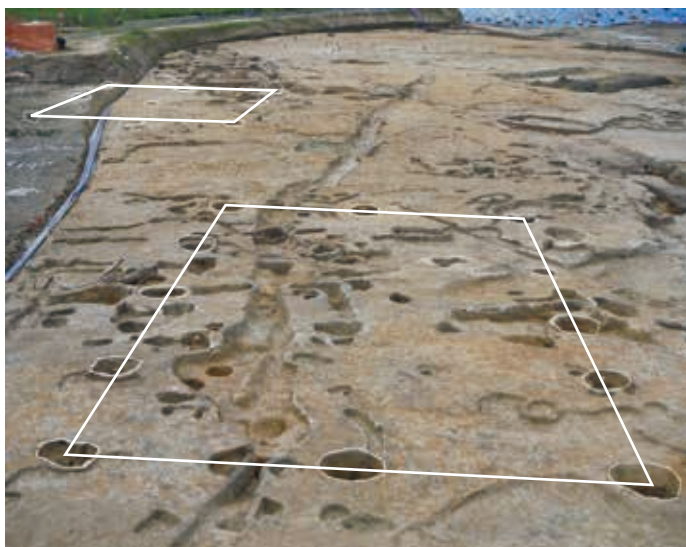
調査地遠景



7世紀後半の溝



平安時代後半の河跡



掘立柱建物（2×2間、2×4間）



河跡から出土した軒丸瓦

H30 発掘調査

しょう にしじま いせき つばくらはいじ かがし
庄・西島遺跡、津波倉廃寺 [加賀市]

庄・西島遺跡は江沼平野のほぼ中央にあり、庄、西島、七日市、七日市新、桑原、津波倉、二子塚の町域に及ぶ広大な集落遺跡です。

発掘調査は国道8号の拡幅工事に先立つもので、平成27年度からはじまった調査も、今年度で4年目となりました。この間、多くの調査成果があがっていますが、古代寺院とされる津波倉廃寺に伴う情報は瓦片を除き乏しい状況にあります。

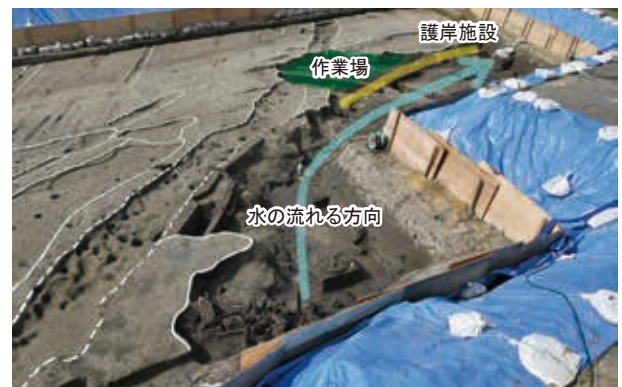
今年度は遺跡の東側を中心に調査を行っており、東端のS区では、昨年度に引き続き7世紀頃の掘立柱建物や土坑を確認しました。

調査区の最も広いU区では、奈良・平安時代の河跡を検出しました。河の左岸では一角を掘り広げて作業場とし、水際に杭と横板による護岸施設を設けていました。この周辺及び下流側からは斎串、人形、舟形、馬形、火きり臼などの祭祀具の他に木沓、曲物容器、皿、盤、折敷、箸、櫂、田下駄、独楽、建築部材などの多種多様な木製品や編み物（編みカゴか）が出土しており、この水辺は祭祀を含む多目的な空間として利用されたものと考えられます。

U区の河跡を東に望む微高地上のM2区では、弥生時代後期から終末期の竪穴建物が3棟重なって見つかりました。周辺ではこれまでに同時期の建物を8棟確認しており、住環境の良好な微高地上を選んで、建物を建て替えながら生活していた様子が見えます。



調査区遠景（東から）



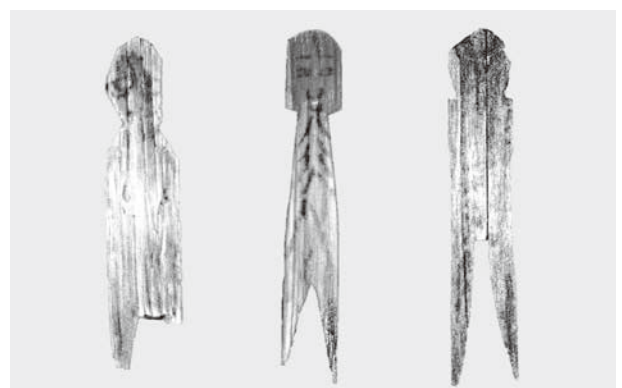
奈良・平安時代の河跡（U区）



木沓出土状況（U区）



弥生時代の竪穴建物（M2区）



人形の赤外線写真（U区）

H30 発掘調査

さかい 酒井バンドウマエ遺跡 [羽咋市]

酒井バンドウマエ遺跡は羽咋市酒井町にある遺跡で、^{こいしがみね}碁石ヶ峰西側の^{せんじょうち}扇状地に位置します。今年度調査では、昨年度に確認した奈良・平安時代と中世の遺構の他に、縄文時代晩期末から弥生時代初め頃の遺構の広がりを確認することができました。

調査区南側の最下層で、縄文時代晩期末から弥生時代初め頃の^{どこうぼ}土坑墓1基と川跡を検出し、まとまった土器が出土しました。また、弥生時代後期の川跡もみつかっており、狭い範囲から完形品の^{つぼ}壺や土砂で押しつぶされた^{かめ}甕が隣接して出土しています。

下層では奈良・平安時代の^{たてあなたてもの}竪穴建物1棟、^{ほったてばしらたてもの}掘立柱建物8棟などを検出しました。竪穴建物は^{がいしゅうこう}外周溝が巡る8世紀中頃の^{かじ}鍛冶関連の建物で、床面の作り替えや補修を行い、ほぼ同じ場所で最初が^{かまど}カマド、次に^{かじろ}鍛冶炉、そして最後に再びカマドを設けた^{かいてん}変遷が観察できました。外周溝の形状は概ね^{すみまるほうけい}隅丸方形ですが、南西側がやや膨らんでおり、南西側の隅から水が外へ流れ出る構造になっていたようです。また、外周溝の東側からは、^{かい}舟をこぐ^{すえき}櫂や多くの^{はじき}須恵器や土師器が出土しました。

なお、掘立柱建物8棟は方向の異なるものがあり、少なくとも3時期のグループに分類することができるようです。



土坑墓（白線：土坑墓掘方）



川跡から出土した弥生時代後期の壺



竪穴建物全景



竪穴外周溝から出土した櫂



竪穴建物内の鍛冶炉

H30 古代体験

講座『玉づくり』をはじめました

石川県の弥生時代や古墳時代ではたくさんの管玉くだたまや勾玉まがたまなどが作られていたことをご存知でしょうか。小松市八日市地方遺跡ようかいちじかたいせきや金沢市塚崎遺跡つかさきいせき、白山市浜竹松B遺跡はまたけまついせきなど全国的にも有名な遺跡があります。体験工房の随時体験では、みなさまから「まが玉づくり」に好評をいただいておりますので、今回は講座としても行うことにしました。「ガラス玉づくり」と本格的「玉づくり」は職員にとってもはじめての挑戦であり、試行錯誤と実験の連続でした。

古代体験ミニ講座『ガラス玉づくり』

12月23日(日)に行いました。かつて古代体験まつりで、「ガラス玉」や「ガラス勾玉」づくりを行いましたが、ことごとくうまくいきませんでした。その大きな原因の一つが、本物志向を目指し七輪に木炭スタイルで行ったため十分な火力が上がらず、しかも火力が不安定であったことでした。そのため今回はガラス玉専用のバーナーを用い、ガラスの色は、紺、空色、黄色、ピンク色とカラフルにしました。

まずはプロパンガスのコックを開けてバーナーに火をつけ、鉄芯棒とガラス棒をしっかりとあぶります。次にゆっくりとガラス棒の先端を溶かして鉄芯棒に巻き付け、回転させて丸い形に仕上げます。良い形になったら徐冷材じょれいざいで冷やし、水の中で砥石を使ってバリを取ってできあがりです。最初はこわごわであった体験者の方々も2個、3個と作るにつれて慣れてきて、大きなガラス玉にも挑戦されていました。



まずは、作り方のデモ



いっしょに作っています



炎で溶かしてまーるく

古代体験学習講座『玉づくり』

1月20日(日)に行いました。使用する石はいつもの“滑石”ですが、製作方法は「施溝分割」という弥生時代中ごろの技法による本格的な「玉づくり」体験です。それはまず、割りたい石の表面に結晶片岩けっしょうへんがんという板状の石(石鋸いしのこ)で溝をつけます。この溝に堅い木のクサビをあてて石で叩き、キレイに割って形を整えます。次に石で磨いて勾玉の形に仕上げますが、目指すは北陸独特のくびれをもつ勾玉です。ひもを通す穴は卑弥呼ひみこがいた弥生時代に使われた鉄のキリであけました。最後はきめの細かな仕上げ砥石ともしで磨いて完成です。



完成したイメージは…



石鋸でしっかり溝を作ります



クサビできれいに割ります

H30 古代体験

古代体験学習講座 『須恵器づくり』

第3回学習講座として、平成30年10月28日(日)に「須恵器づくり」が行われ、21名の参加者がありました。

最初に須恵器の歴史や特徴についての説明を受け、そのあと、県内で出土した須恵器を参考に「杯」や「壺」などを製作しました。一見、簡単そうに見える形でも、ロクロで薄くつくるのは難しく、参加者のみなさんは古代須恵器づくりの技術の高さを体感できたようでした。

製作した作品は、しっかり乾燥させたあと、当センターの「復元古窯」に窯詰めしました。職員が製作したものも含め、窯詰めした作品は350点ほどになりました。薪を燃料に約70時間かけてじっくりと焼き上げ最後には1,200℃を越える高温で焼成し、終わりに窯を閉じて空気を遮断し還元状態にしました。窯が冷めるのを待ち1週間ほどしてから窯出しを行い、12月15日(土)から当センター本館ホールで作品の展示を行いました。



製作



焼成



展示

H30 古代体験

古代体験ミニ講座 『弥生のはたおり体験』

昨年に比べると雪のほとんどみられない平成31年2月17日(日)に「弥生のはたおり体験」が行われ、13名の参加者がありました。

織機による布づくりは、弥生時代からはじまったと考えられており、その頃の織機は「原始機」と呼ばれています。一部の部品は遺跡からもみつっていますが、一組そろっての出土はまだないようです。小松市の八日市地方遺跡や宝達志水町の荻市遺跡などからは、布巻具とみられるはたおりの部品が出土しています。

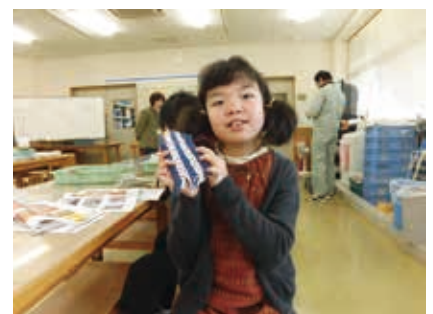
体験では、復元した「原始機」を使って、タテ(経)糸の上糸と下糸の間に、ヨコ(緯)糸を通して交差させながら、そのくりかえしによって布を織りあげていきます。慣れてくると、手際よく上手に織りあげるようになり、最後はタテ糸の端を整えて「弥生布」の完成です。自分の布を手にした参加者のみなさんは、とても満足気でうれしそうでした。



はたおりの解説



タテ糸にヨコ糸を通します



私の布ができました

H30 情報発信

石川県埋蔵文化財センター開館 20 周年記念 講座 考古学最前線

「鉄器招来」てっぎしょうらい ～八日市地方遺跡から弥生社会を再考する～

平成 30 年 11 月 18 日 (日)、サイエンスヒルズこまつを会場に、弥生時代研究を進める 5 人の講師を迎え、小松市、愛媛大学東アジア古代文化研究センターとの共催で開催しました。小松市や県が今までの発掘調査でその実態を明らかにしてきた、弥生時代中期の大規模集落「八日市地方遺跡」を取り上げ、昨年度の石川県埋蔵文化財センターの発掘調査で出土した東アジア最古となる「柄付き鉄製鉈」が意味するものについて、様々な視点から探るシンポジウムとなりました。

はじめに愛媛大学の村上恭通教授が、「東アジアの古代鉄文化」と題した基調講演を行いました。その後、文化庁の禰宜田佳男主任文化財調査官が「弥生時代の石器と鉄器」について、次に当センターの林大智専門員が八日市地方遺跡の最新成果について基調報告を行いました。

参加した方から「最初の村上さんの話で鉄器の全体の流れが理解でき、禰宜田さんの話で他の道具との関係や今後の課題が見え、林さんのわかりやすい説明で最新情報を一気に知ることができ、得した気分」との感想がありました。

まさに現在の弥生時代鉄器研究の最前線に触れる機会となりました。会場後方では、小松市埋蔵文化財センターの発掘調査で出土した木製品などを実際に手に取り見学する場が設けられ、多くの方々が担当職員に質問しながら見学する姿がみられました。

午後は、小松市埋蔵文化財センターの下濱貴子参事を加えたメンバーで、明治大学の石川日出志教授がコーディネーターとなり、八日市地方遺跡から弥生社会を再考するための活発な討論が繰り広げられました。鉄器とその柄となる木製品の製作方法や、鉈の使用法、ものを介した日本海沿岸域での交流などから、八日市地方遺跡に暮らした人々の動向や当時の社会の様相まで幅広く話し合われました。会場にいた考古学以外の専門家の皆さんからも発言を受けながら、より深く八日市地方遺跡の魅力を知る記念講座となりました。

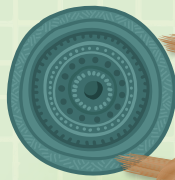


会場のようす



パネルディスカッション





まいぶん日誌

平成30年 平成31年
11月 ~ 2月



11月

みなさん
お上手でした



集中!!須恵器づくり

ちゃんと焼けますように



須恵器リレー!!
ひとつひとつ
窯に入れます

「平成」最後の
窯焚きです



収蔵庫の遺物の
整理中!



重たいよ
ヨイシヨ!

紅葉と桜
ぜひいたくな
眺めです



12月

力作ぞろい!



みなさんの
須恵器が
焼き上がり
ズラーリ!



冬に向かって
準備をしっかり
たくさん雪が積もるかな?

2月

いつもより
ずっと少ない雪
ちょっと物足りない!



収蔵庫
改装中



ファイト!



いよいよ
展示です
準備中



親子で協力
ガラス玉づくり



1月

発掘報告会の
ポスター発送



きれいな形に
なったかな?

みなさんの町にも
届きますよ!

初講座
「玉づくり」



まが玉と
管玉を
作ったよ



手形、足形の
土玉づくり